

2020年の大学卒業生 進路決定率87.7%!

旺文社『大学の真の実力 情報公開BOOK』調査から、
大卒後の「進学」+「自営業・無期雇用」+「臨床研修医」の人数で
「進路決定率」を算出!

旺文社 教育情報センター 2021年1月5日

旺文社では例年9月、『大学の真の実力 情報公開BOOK』を刊行している。全国の大学に調査を依頼。各大学の学部別の入学者関連データ(入学定員数、入学者数、女子占有率、地元占有率、入試方式別の入学者数など)、学部別の卒業生関連データ(卒業生数、進学者数、就職者数、公務員就職者数、教員就職者数など)、全学データ(男女別学生数、教員一人あたり学生数、外国人教員数など)を収録したデータブックだ。本稿では、卒業生関連データを基に、2020年3月大学卒業生の動向を、国公立私立大学別、男女別、学部系統別などの切り口で探してみる。

◎本稿では特記がない場合、『大学の真の実力 情報公開BOOK』(旺文社/2020年9月刊)の調査データに基づく。

◎調査データは2019年4月~2020年3月までの大学卒業生の、2020年5月1日現在の情報。

◎学部系統分類は、旺文社の分類に基づく。

◎本稿での進路区分の基準は次の通り。

- ・「進学者」=大学院研究科、大学学部、短期大学本科、専攻科、別科へ進学した者。
- ・「就職者」=自営業主等と無期雇用労働者の合計。

(注)本稿では、有期雇用労働者(雇用契約期間1か月以上の者)・臨時労働者(雇用契約期間1か月未満の者)は就職者に含めていない。文部科学省『学校基本調査』が示す「就職者」、旺文社『大学の真の実力 情報公開BOOK』に掲載の「就職者」とは基準が異なる。

- ・「臨床研修医」=医学科、歯学科の卒後臨床研修医。
- ・「その他」=「専修学校・外国の学校等入学者」「進学準備中の者、就職準備中の者、その他」「不詳・死亡の者」。

■「進路決定率」——就職率だけではわからない卒業後の進路状況を数値化!

大学卒業後の進路は、大学院などへの進学と、就職に大別できる。大学卒業生のなかには、たとえば資格試験準備や就職準備の者もあり、個別の事情があるとは言え、数値として表す場合は、上記囲みで示した「進学者」「就職者」「臨床研修医」の合計値が卒業生に占める割合で示すのが妥当と考え、これを本稿では「進路決定率」と定義する。

$$\text{進路決定率(\%)} = (\text{進学者数} + \text{就職者数}) \div \text{卒業生数} \times 100$$

※就職者数に臨床研修医を含む

卒業後の進路を示す指標として従来、就職率がある。この就職率、大学ガイドなどでよく見かけるが、計算式によって、求められる数値の意味は異なる。

計算式① 就職率(%) = 就職者数 ÷ 卒業者数 × 100

計算式② 就職率(%) = 就職者数 ÷ 就職希望者数 × 100

計算式③ 就職率(%) = 就職者数 ÷ (卒業者数 - 進学者数) × 100

計算式①…就職者が卒業者に占める割合を算出するため客観的な数値ではある。しかし、大学院への進学者が多い大学（とりわけ理系の大学や学部）では、その数値は反映されないため、就職率が低く算出される可能性がある。

計算式②…就職希望者を分母として算出している。「希望」という主観的な要素が入っている。たとえば、就職活動の結果、職を得ることができずに卒業し、卒業後の動向の詳細が不明になった場合、大学が「もともと就職を希望していなかった」と分類することは理論上可能だ。

計算式③…卒業者から進学者を減じたものを分母としている。客観的な数値と言える。

全体として…そもそも就職者の基準はどうなっているのか。ひとくちに、就職者と言っても、自営業、無期雇用、有期雇用、臨時労働などがある。たとえば、派遣労働者（文部科学省『学校基本調査』では、事業所で正規の職員扱いで雇用されていても労働者派遣法の適用を受ける場合は、有期雇用または臨時労働に分類）や、有期雇用のうち雇用期間1年以上でフルタイム勤務相当の者（文部科学省『学校基本調査』では、就職者扱い）など状況はさまざまだ。

計算式①では、大学院への進学者が多い大学と、そうではない大学を、就職率で比較することは困難だ。計算式②では、客観性の面での不安定さが否めない。計算式③は、こと就職に特化すれば客観的だが、卒業後の進路状況を示そうと考えた場合には、やはり進学者も含めたデータを見てみたくなる。いずれの場合も、就職者の内訳は気になる。

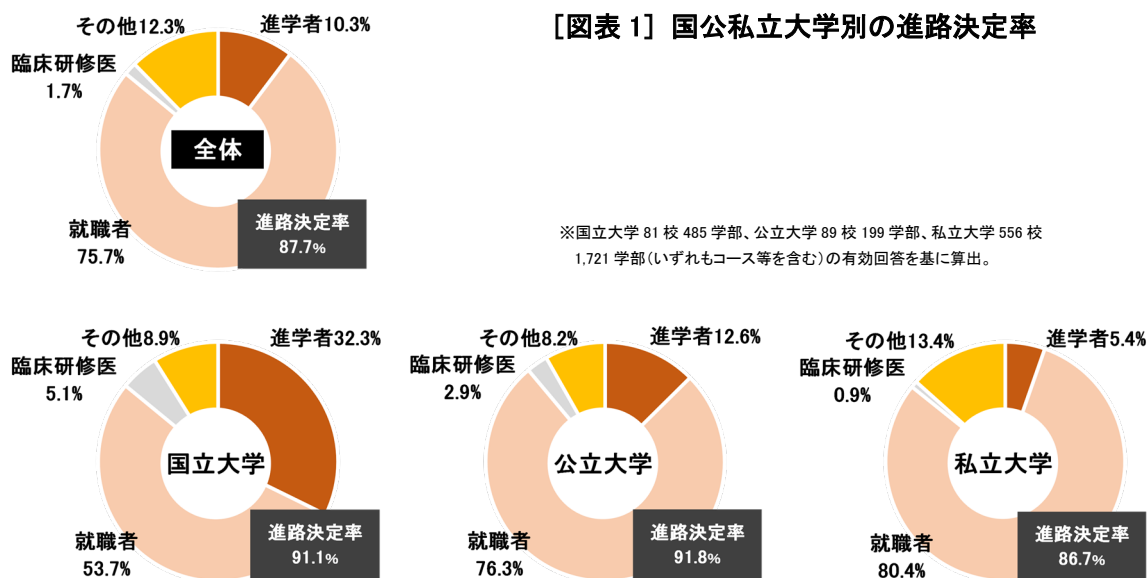
本稿では、前ページの囲みで記した通り「就職者」は、自営業主等と無期雇用労働者の合計とした。制約の強い基準とも言えるが、卒後直近の進路「決定」の指標として定義した。あわせて、進学者も進路「決定」に含めることで、大学卒業後の進路状況を数値化できる。

この進路決定率により、国立大学・公立大学・私立大学の別、男女の別、学部系統の別、大学の規模別など異なる切り口でも、同列の基準で数値を比較することができる。

受験生が大学選びをするとき、進路指導の先生方が大学を調べるときなど、その大学の卒業後の進路状況を見る際に、進路決定率の考え方が一助となれば幸いだ。受験生においては、卒業後の進路状況を志望校決定の参考とする際には、その大学の公表値が算出された計算式を確認したり、定義が不明な場合は照会したりするとよいだろう。

次ページから、旺文社調査のデータを各種切り口で見ていく。

【図表 1】 国公立大学別の進路決定率



■国公立大学計の進路決定率 87.7%！ 設置者別にそれぞれ特徴が

図表1を見ていく。国立大学は、他に比べて進学者の割合が圧倒的に高いのが特徴的だ。理学部系統、工学部系統、農・獣医畜産・水産学部系統は、他の系統に比べて進学者の割合が高い。国立大学の卒業者のうち5割弱がこの系統に属している。進学者が多いことが、進路決定率を押し上げている要因となっている。臨床研修医の割合の高さも進路決定率を高めている。

公立大学は、進学者、就職者、臨床研修医の割合ともに全体の値を超えており、進路決定率が高い。公立大学には、看護・医療・栄養学部系統の学部が多く設置されており、卒業者のうち、4分の1弱 (22.9%) を占めている。また、理系学部の卒業者も多く、理・工・農系統に紐づく学部卒業者が3割強 (33.7%) を占めている。資格取得を背景に就職している者が多いことと、進学者の割合が高い学部系統の卒業者も多いことが、進路決定率を高めていると見られる。

私立大学は、就職者の割合が高い一方で、その他の者の割合も他に比べて高い。文系の学部系統の卒業者が理系に比べて多いことが進学者の割合が低いことの要因のひとつだろう。また、学部数や学生数が多く、バラエティ豊かであることが、その他の割合が高い要因でもあろう。図表2で示した通り、進路決定率のゾーン別の学部数の分布も国公立大学に比べると幅広く、進路決定率80%未満の学部が2割強ある。

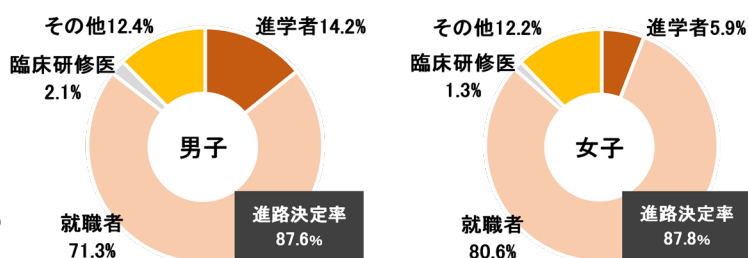
【図表 2】 国公立大学別 進路決定率ゾーン別の学部数

進路決定率	国立大学 91.1%	公立大学 91.8%	私立大学 86.7%
90~100%	329	145	661
80~90%未満	110	37	686
70~80%未満	33	11	247
60~70%未満	8	2	78
50~60%未満	4	2	35
50%未満	1	2	14

※国立大学 81 校 485 学部、公立大学 89 校 199 学部、私立大学 556 校 1,721 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。

**[図表 3]
男女別の進路決定率**

※国立大学 81 校 485 学部、公立大学 89 校 199 学部、
私立大学 550 校 1,710 学部(いずれもコース等を含む)
の有効回答を基に算出。



■男子は進学者の割合が高く、女子は就職者の割合が高い

男女別では進路決定率に大きな差異はないが、その内訳を見ると、進学者と就職者の割合の高低が対照的だ。

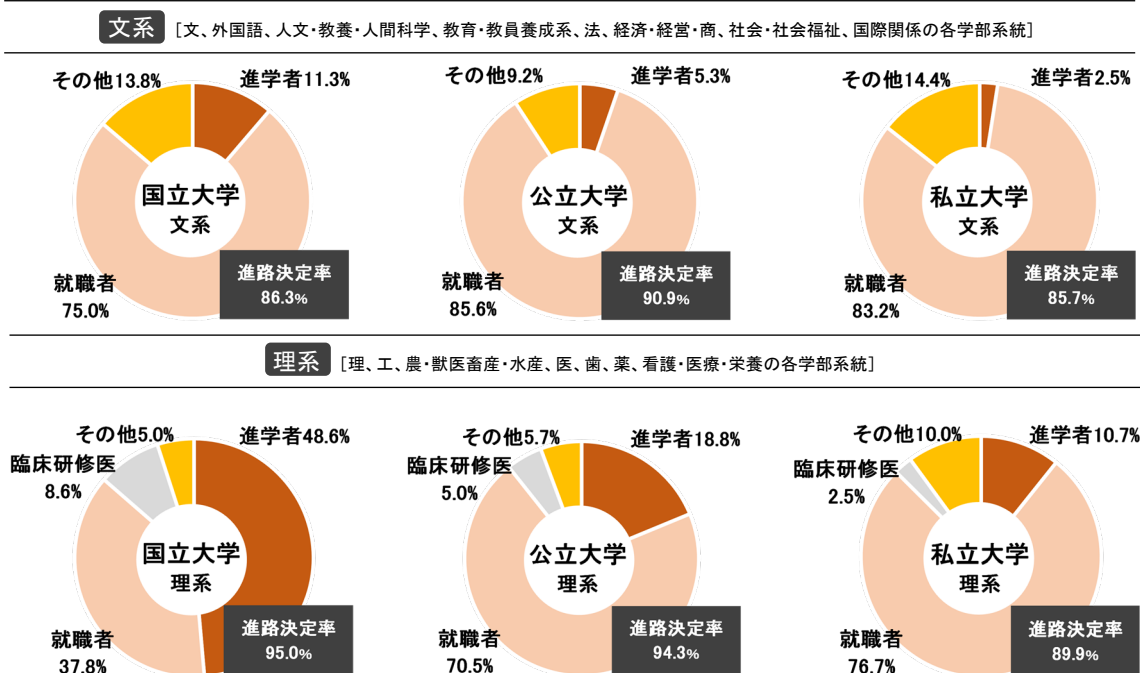
男子は進学者が多い。進学者の多い学部系統（理、工、農・獣医畜産・水産の各系統）では、もともと男子が多く、進学者の割合も男子が高いことが影響している（この3つの系統に紐づく卒業生の男女の割合は、およそ7対3で男子が多い。そのうち進学した者の割合は男子32.6%、女子18.1%）。進学者が多い国立大学の卒業生の男女比がおよそ6対4という側面もある。図表4を見ても、国立大学の理系の進学者の割合の高さは群を抜いている。一方、女子は就職者が多い。資格取得を背景に就職する看護・医療・栄養学部系統の卒業生に占める男女の割合は、3対7で女子が多いことも下支えしていると見られる。

■学部系統別の進路決定率。理、工、農・獣医畜産・水産、医の各系統が高い

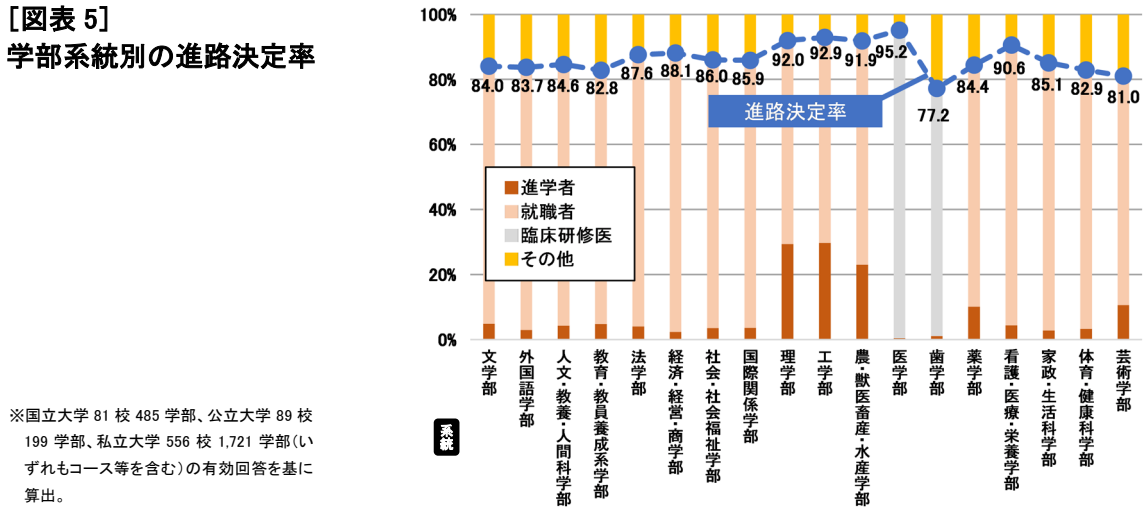
次ページの図表5に、学部系統別の進路決定率を示した。

**[図表 4] 国公立私立大学別
文系・理系別の進路決定率**

※国立大学 81 校 485 学部、公立大学 89 校 199 学部、私立大学 556 校
1,721 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。



[図表 5]
学部系統別の進路決定率



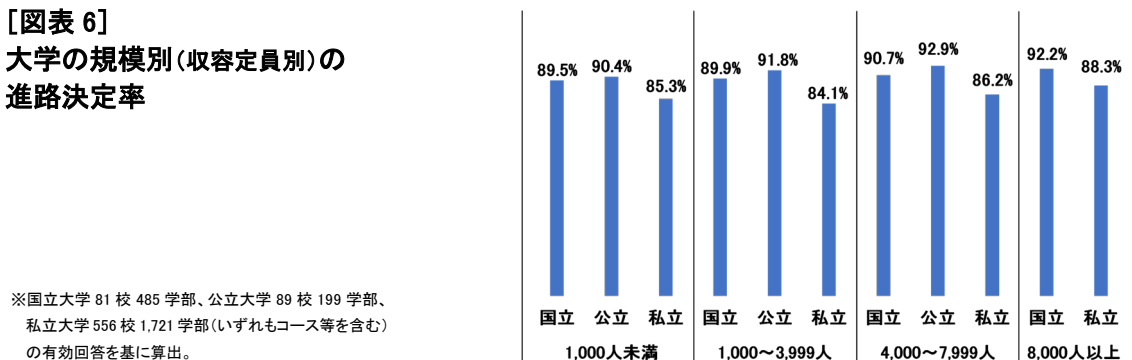
※国立大学 81 校 485 学部、公立大学 89 校 199 学部、私立大学 556 校 1,721 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。

全体の進路決定率は 87.7%。これを超えているのが、経済・経営・商、理、工、農・獣医畜産・水産、医、看護・医療・栄養の各学部系統となっている。まず、これまでも言及している理系 3 系統（理、工、農・獣医畜産・水産）の進学者の割合の高さが目を引く。研究内容の高度化、学際化などで、研究の主が大学院になっていることが、これらの系統の進学者の割合を高め、進路決定率を押し上げている。

看護・医療・栄養学部系統は、国家試験の高い合格率が背景にある（たとえば看護師国家試験の大学新卒合格率はここ数年、95%超）。全系統のうち、もっとも高い就職者の割合となっている（86.2%）。医学部も同様に、国家試験合格率が高い。医師国家試験の大学新卒合格率は概ね 90～95%の間で推移しており、全系統中、もっとも高い進路決定率を支えている。一方、歯学部の進路決定率は全系統のなかでもっとも低い数値となっている。歯科医師国家試験の大学新卒合格率は 8 割弱に留まっている。

文系学部のなかでは、人文科学系の学部と比べると幾分、社会科学系の学部のほうが進路決定率は高いと言えよう。教育・教員養成系学部の進路決定率が低い。本稿では冒頭で示した通り、「就職者」を自営業主等と無期雇用労働者の合計と定義している。教員採用に際しての「臨時的任用」を就職者に含んでいないことが要因のひとつと見られる。

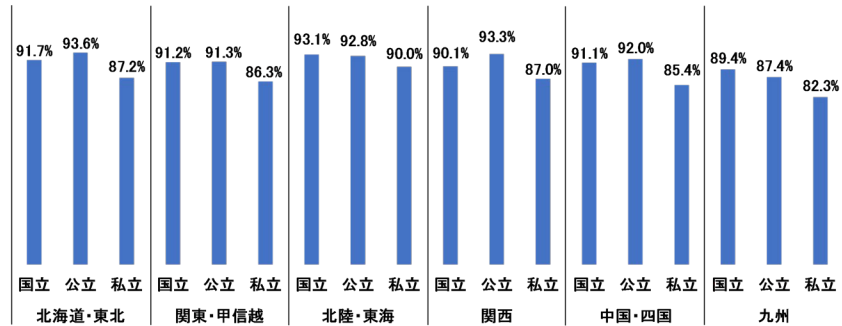
[図表 6]
大学の規模別(収容定員別)の進路決定率



※国立大学 81 校 485 学部、公立大学 89 校 199 学部、私立大学 556 校 1,721 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。

[図表 7]
エリア別の進路決定率

※国立大学 81 校 485 学部、公立大学 89 校 199 学部、私立大学 556 校 1,721 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。大学の本部所在地で集計。



■大規模大学や都市部のほうが進路決定率は高い？ 実際には大学によりさまざまだ

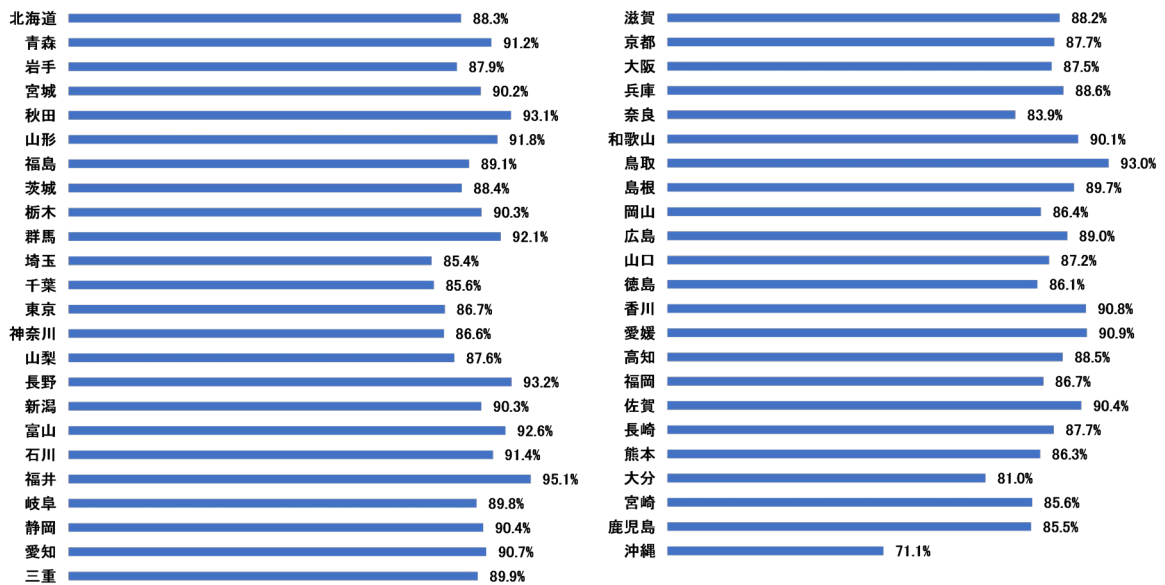
前ページの図表 6 に大学の規模別(収容定員別)、国公私立大学別の進路決定率を示した。たしかに、規模が大きい大学のほうが、概観では進路決定率が高い傾向にある。ただし、本稿では示していないが個別大学のデータを見ると、名の通った大規模大学でも進路決定率が 8 割未満の学部が見られるのも事実だ。

図表 7 と 8 では、エリア別と都道府県別の進路決定率を示した。当該のエリア・都道府県に国立・公立・私立の大学が何校、どのような規模で設置されているかで事情は異なるが、北陸・東海エリア、そこに所在する県の進路決定率は高い。ただしこちらも各エリア、都道府県ともに、規模別の進路決定率と同様、個別のデータを見ると進路決定率の高低は大学によりさまざまだ。

■有期雇用労働・臨時労働に就いた者は、どのくらいいるのか

次ページの図表 9 に、大学卒業後に雇用契約期間の定めのある職に就いた者の割合を示した。公立大学でその割合が低く、教育・教員養成系学部でその割合が高い。

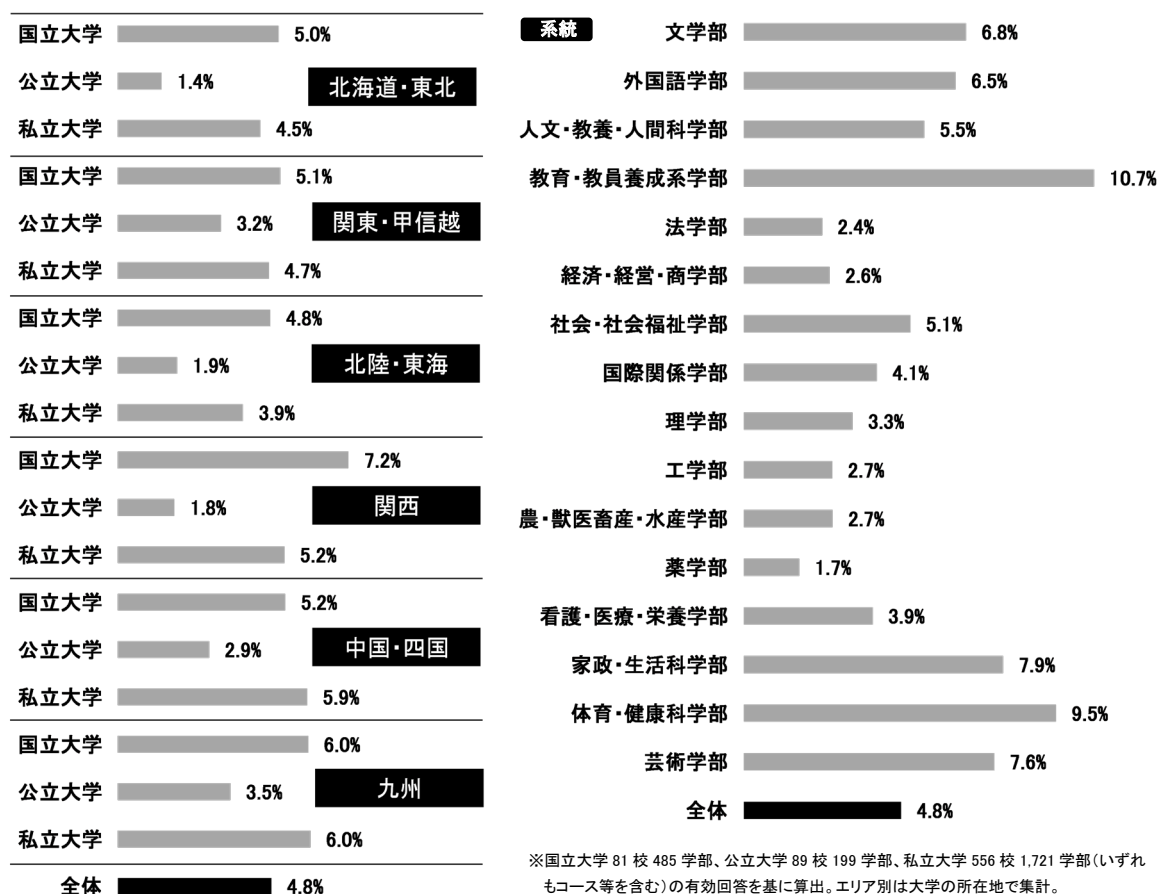
[図表 8] 都道府県別の進路決定率



※国立大学 81 校 485 学部、公立大学 89 校 199 学部、私立大学 556 校 1,721 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。大学の本部所在地で集計。

[図表 9]
有期雇用労働、臨時労働に就いた者の割合
(国公立大学別／エリア別／学部系統別)

※(有期雇用+臨時労働)÷
 (自営業+無期雇用+有期雇用+臨時労働)で算出。



※国立大学 81 校 485 学部、公立大学 89 校 199 学部、私立大学 556 校 1,721 学部(いずれもコース等を含む)の有効回答を基に算出。エリア別は大学の所在地で集計。

教育・教員養成系学部は、前述した通り、教員の「臨時的任用」が影響していると考えられる。文部科学省データによると、国立大学の教員養成課程を2019年3月に卒業し、教員として正規採用された者は4,514人、臨時的任用は1,962人となっている。計6,476人のうち、臨時的任用は3割になる。

今年度(2020年4月～2021年3月まで)の大学卒業者の進路は、コロナ禍によりこれまでと状況が一変する可能性が高い。運輸業、観光業、イベント業、飲食業、小売業をはじめさまざまな業界が厳しい状況に置かれている報道を目にする。大学卒業後の進路状況は、受験生の志望動向に影響を与える要因のひとつだ。コロナ禍の収束が見通せない状況の下、今後も情勢に注視していきたい。

(2021.1 加納)